

論文審査結果の要旨

平成 28 年 10 月 30 日（日）午前 10 時から 12 時まで、文学部会議室において公開審査会が開かれ、本論文について概要の発表と論文内容についての質疑応答が行われた。概評と主な論点は以下の通りである。

概評

英語における主語省略現象は話し言葉で中心的に起こるため、従来の記述文法のなかでは取り上げられ方が限定的であったが、話し言葉も対象とするコーパスの構築によりその頻度や重要性が意識されるようになった。本論文はこのような背景のなかで、先行研究で重視されてこなかった三人称代名詞 *it* の主語省略に注目し、*it* の主語省略傾向が明確に現れる知覚動詞を用いた文を分析の対象とした。この点に独創性が見られる。

本論文では OED、COCA、COHA を用いたデータ重視の調査、分析により説得力のある議論が展開されており、全体として質・量共に問題ない。とりわけ第 5、第 6、第 7 章で行われた事例研究は、各研究に新しい事実の発掘が含まれており興味深い。この 3 つの章は独立しているわけではなく互に関連しながら発展している。語用論、認知言語学、意味論、談話機能言語学、定型表現などに貢献できる学際的な広がりを持つ研究と言える。

論文全体の構成が整理されており、細部を丁寧に論じながらも章を追って展開される論理の筋道が明解である。議論を進める英語表現も正確で、例、図、表の適切な使用により説得力のある論文となっている。

審査会で取り上げられた主たる論点（論文の章立ての順による）

1. 先行研究の整理の問題

第 1 章では、記述文法での主語省略の扱いと、口語文法での主語省略記述、そして主語省略に関する語用論的先行研究が同列に扱われ前後不問で引用されている。まず基本的な記述文法（Quirk et al.(1985)や Biber et al.(1999)など）における省略、特に主語省略についての記述を整理してから、Carter and McCarthy の口語文法に特化した研究に移り、その後主語省略の語用論的個別研究に移っていくほうが、議論の道筋がわかりやすく、広い意味での英文法研究の枠組みの中での位置付けも明確になるのではないか。

2. 意味論と語用論

主語省略について従来は語用論からの研究が中心であったが、本論文では意味論の立場から研究することによって主語省略の要因について新たな知見を得たと筆者は主張する。しかし、語用論の先行研究とされる第 2 章の事例研究 1、2 は意味論的であり、意味論的分析とされる第 7 章の情報量からの考察には語用論的側面がある。語用論と意味論がオーバーラップする部分も多い。

従って、本論文の独創性は、筆者が主張するように語用論のみならず意味論からアプローチし

たという点にあるのではなく、むしろ、三人称代名詞 *it* が主語であるときの主語省略に特化して論じた点にあるのではないか。

3. 日本語の分析

第4章2節に日本語の主語省略に関する議論が導入され『雪国』の原文と英語訳の比較の例が紹介されるが、日英語対照の視点は他の個所では示されておらず、唐突な印象を受ける。

4. データの一貫性の問題

第5章では、OED を使って質的な分析を行い、COCA、COHA 使って量的な分析を行っているが、データの一貫性を確保したほうがよかったのではないか。一方で、この二つの分析方法を組み合わせることによって見えてきた事実もある。動詞 *feel* の歴史的な二つの変化、SVO から SVC への変化と、SVC 内の有生物主語から無生物主語への変化を捉えることができた点が評価できる。

一方歴史的変化については OED を用いた質的分析に加えてさらに精査する調査が望まれる。

5. 主体化と主語省略

第5章では、主体化の観点から動詞 *feel* の意味変化を扱っているが、主体化だけで、*feel* に見られる多様な意味的な変化をすべて捉えることができるのか疑問が残る。例えば OED において、*He feels* のような三人称の主語が *I feel* のような一人称の主語よりも初出が早い点に注目して、*feel* には三人称から一人称への主語の変化が見られるとしているが、これは主体化の一種と言えるのであろうか。また、*feel* のような知覚・経験を表す動詞に関して、本当に三人称の方がより基本的と言えるのか、通時的な証拠だけでなく、共時的な証拠があると説得力が上がる。

6. 指示性と主語省略

第6章では、知覚動詞 *feel, look, sound, smell, taste* を例にして、これまでは注目されてこなかった三人称の主語省略を定量的に論じている。ここでは、これらの動詞において、SVC 型の非人称主語に主語省略が多い点、指示性が低い非人称主語に省略が起こりやすい点、*look* と *sound* に特に主語省略が多い点を示している。これらの発見は従来の主語省略の議論では論じられてこなかったため、本論文独自の研究成果として高く評価できる。

7. 情報量と主語省略

第7章では、句と節を分析することで、情報量が大きい節の方が省略は起こりやすいこと、つまり、情報量の多寡ではなく主語の情報量の低さが主語省略に関係することを示した。これは先行研究での不明点を補うものである。一方で、主語省略は情報量だけでなく文体の固さや音節数にも関係すると考えられる。*Look like* と *look as if* では後者のほうが情報量が多いが、前者は談話標識化しているのではないか。

以上のような論点について質疑応答が行われ、今後の課題として検討すべきいくつかの問題点も明らかになったが、論者からは概ね説得力のある応答が得られた。その結果、論者が英語の主語省略現象について認知言語学、語用論、意味論の観点から研究し、先行研究を踏まえた上で独自の調査により新たな知見を提示していることが明らかになった。

論文審査、公開審査会の結果から総合的に判断して、本委員会は本論文が博士（文学）の学位を与えるに値するものと認める。